

## 看護系大学の実習を受け入れた 小規模病院の実習指導者の体験

遠 藤 恵 子 ・ 高 橋 直 美 ・ 南 雲 美代子  
菅 原 京 子 ・ 安 保 寛 明 ・ 沼 澤 さとみ

## 看護系大学の実習を受け入れた 小規模病院の実習指導者の体験

遠藤 恵子<sup>1)</sup>・高橋 直美<sup>1)</sup>・南 雲 美代子<sup>1)</sup>  
菅原 京子<sup>1)</sup>・安保 寛明<sup>1)</sup>・沼澤 さとみ<sup>1)</sup>

### Nurse Administrators' and Practice Leaders' Experiences in Small Hospitals Accepting Nursing University Practice

Keiko Endo<sup>1)</sup>, Naomi Takahashi<sup>1)</sup>, Miyoko Nagumo<sup>1)</sup>  
Kyoko Sugawara<sup>1)</sup>, Hiroaki Ambo<sup>1)</sup>, Satomi Numazawa<sup>1)</sup>

#### Abstract

This study explores the experiences of nurse practice leaders in small hospitals accepting nursing universities' clinical practice courses. An interview survey was conducted with nurse practice course leaders working in those small hospitals. We asked participants to elaborate comprehensively on what they did and thought during practice guidance, subsequently analyzing their responses in an inductive manner. Consequently, the following nine categories were extracted as their experiences: [I want students to know widely diverse activities in hospitals and our nursing care.], [Student awareness is raised in a secure atmosphere.], [Nurses cooperate as a whole, with the leader at the center.], [I am anxious about fulfilling the expected responsibilities for guidance.], [We collaborate with universities to achieve the practice goals.], and [The experiences of practice guidance improve nursing care quality.]. Practice leaders in small hospitals guide students with pride in their nursing care and believe that practice guidance improves nursing care quality. These findings suggest that nursing practice requested by universities can be implemented in small hospitals and that practice guidance contributes to enhancement of nursing care quality in small hospitals.

**Key words :** nursing practicing, small hospitals, nurse practice leader, practice teaching, nursing university

#### はじめに

日本看護系大学協議会の2018年度調査<sup>1)</sup>では、看護系大学の85%以上が臨地実習に課題や問題があると回答し、その課題や問題の内容の多くは実習施設の不足・確保困難であり、領域別にみる

と、在宅看護領域の施設確保困難が65%と最も高くなっている。実習施設の確保と時代の要請に応じた実習の検討、大学の特性を考慮した実習、そして大学の責任でフィールドを育てる必要性が指摘されている<sup>2)</sup>。本学でも、地域包括ケアや在宅看護を学習できる実習施設の確保は以前からの

1) 山形県立保健医療大学保健医療学部看護学科  
〒990-2212 山形県山形市上柳260番地  
Department of Nursing,  
Yamagata Prefectural University of Health Sciences,  
260 Kamiyanagi, Yamagata-shi, Yamagata, 990-2212, Japan

(受付日 2023. 10. 27, 受理日 2024. 2. 21)

課題である。

本学の「山形発・地元ナース養成プログラム」(以下 地元ナースプログラム) が、平成 26 年度文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラムに採択された<sup>3)</sup>。ここでいう「地元ナース」とは、小規模病院等で、医療機関や公共交通機関の少ない地域に暮らす地元住民の多様な健康問題に幅広く対応できる看護職を指す。小規模病院は、利用者の多くが慢性的な経過をたどる疾患をもつ地元の高齢者であり医療依存度の高い利用者が増加していることや、施設によっては現任教育があまり実施できていないという特徴をもつ<sup>4)</sup>。これらの特徴を踏まえ、地元ナースプログラムでは、小規模病院等の看護職に対し、地元医療福祉の担い手としての役割を再認識し、発展的な看護実践能力を高めるとともに、学生の看護学実習を実施できる人材育成を目的としたリカレント教育を平成 27 年度から開始した。リカレント教育を修了した看護職のいる小規模病院には看護学実習を依頼した。そして、平成 28 年度には 1 施設<sup>5)</sup>、平成 29 年度は 2 施設<sup>6)</sup>が、各施設として初めての看護学実習を受け入れた。これらの実習は 4 年生の実習であったが、そのうち 1 施設では、平成 30 年度から 3 年生の実習も開始した<sup>7)</sup>。実習を履修した 59 人の学生のうち、「生活する場として多様な地域があること」を 51 人が、「多様な価値観のもとに生活する場があること」を 52 人が、「多様な価値観を持つ住民の健康を守るため、今の状況の維持や変化の見極めが必要」を 45 人が「とても理解できた」と卒業時に回答した<sup>7)</sup>。このように、小規模病院における看護学実習は、対象者が住み慣れた地域の特徴や自分らしさであるその人の価値観を理解する学習に効果があることが確認できた。このため、本学は地域包括ケアや在宅看護を学習できる小規模病院を実習施設として確保し、現在行っている実習を継続、さらには拡大強化したいと考える。

看護学実習指導者を対象とした先行研究では、実習指導に対する不安や困難を抱えているなど、実習指導は実習指導者にとってネガティブな面が多いことが明らかになっている<sup>8)9)10)</sup>。一方、新規に看護系大学の実習施設となり実習指導者となった経験は、自身の力不足を感じるだけでなく実習指導をとおして自ら学ぶ姿勢を身につける<sup>11)</sup>、不

安や困難と同時に、臨床指導者と大学がともに学生を育てたいといった大学への思いがある<sup>12)</sup>、実習指導によるやりがいがある<sup>13)</sup>など、実習指導に対してポジティブな感情があることも明らかになっている。しかし、これらの先行研究では、小規模病院の実習指導者に対象を特化したものは見当たらない。

今後、地域包括ケアや在宅看護を学習できる小規模病院の実習を強化拡大するために、小規模病院ならではの实習指導の課題や、小規模病院と連携・協働するための大学の役割を明らかにする必要がある。そこで看護系大学の看護学実習を受け入れた小規模病院の看護管理者や実習指導者の実習に関する体験を明らかにし、実習における小規模病院と大学との連携・協働の在り方に示唆を得たいと考えた。

## 目 的

本研究は、看護系大学の実習を受け入れた、小規模病院の看護管理者と実習指導者(以下 実習指導者)の体験を明らかにすることを目的とした。

## 意 義

小規模病院が実習を受け入れる際に必要となる大学の支援や、実習における小規模病院と大学との連携・協働のあり方に示唆を得る。

## 方 法

### 1. 対象

東北地方の看護系公立大学の過去 5 年間実習を受け入れている 200 床未満の看護管理者および実習指導者を対象とした。

### 2. 調査期間

令和 2 年 2 月～ 3 月

### 3. 用語の定義

本研究で用いる「体験」とは、小規模病院の看護管理者や実習指導者が、本学の看護学実習を受け入れる検討段階から実習中、実習後までの間に、実際行ったことや考えたこと感じたこととする。

#### 4. データ収集方法

対象の条件を満たす看護管理者に文書で研究協力を依頼し、文書で同意を得た。承諾の場合、実習指導者の紹介を受けた。紹介を受けた実習指導者に文書で研究協力を依頼し、文書で同意を得た。データ収集は、面接を1人につき1回30分をめぐりに行った。面接では、実習指導を受け入れる検討段階から、実習準備、実習中、実習後までの間、実際に行ったことや考えたこと感じたこと、課題、実習を引き受けたことによる施設への影響について包括的な質問で問いかけ、その返答から具体的な内容を語ってもらった。施設ごとにデータ収集の日時を調整し、看護管理者と実習指導者を同時に行うグループ面接か、看護管理者と実習指導者の個別に面接を行うかについては、施設の希望に合わせた。対象者の承諾を得て面接内容を録音した。

#### 5. 分析方法

録音した面接内容を逐語録に起こした。逐語録から、実習を受け入れる前の検討や準備の時期から実際の実習指導、さらに実習が施設に与えた影響について、「実習に関連して実際に行ったこと」や「実習に関連した考えたこと」を抜き出した。抜き出した文章を精読し、意味内容が明確になるように一文で表現したものを〈コード〉とした。コードの意味内容が類似しているものを集め、共通する意味内容を一文で表現し《サブカテゴリー》とした。同様の経過を経て【カテゴリー】とした。分析過程では、繰り返し逐語録を読み、意味内容の類似性や表現の妥当性・適切性について、研究者で意見を交換し信用性を確保した。対象とした施設の看護管理者と実習指導者は、実習指導を受け入れる検討段階から実習後までの間、実習に関する意思決定や実際の実習指導に直接的間接的に関わっていたことから、実習に関連する役割に大きな差異はないと考えた。このため、看護管理者と実習指導者の面接データは区別せずに分析した。

#### 6. 倫理的配慮

研究概要を文書で説明し、文書で同意を確認した。研究協力諾否は自由意志であること、研究協力諾否によって不利益がないこと、同意後でも撤

回できること、個人情報保護することを保障した。山形県立保健医療大学倫理委員会の承認を受けて行った（承認番号1901-29）

## 結 果

#### 1. 対象者

10施設に依頼し、5施設から同意を得た。5施設の病床数は、最小が40床、最大が152床であった。5施設から、それぞれ看護管理者が1人ずつ計5人、各施設の実習指導者2または3人、計12人、合わせて17人と面接を行った。5施設は、すべて慢性期疾患の治療や地域包括ケアに力を入れており、4施設は一般病棟のほか療養型病床を設置していた。3施設は、地元ナースプログラムのリカレント教育修了生のいる施設であった。面接時間は、最短16分、最長75分であった。

#### 2. 看護系大学の実習を受け入れた小規模病院の実習指導者の体験

304のコードから、45のサブカテゴリー、さらに、9のカテゴリーが抽出された（表）。以下カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、コードは〈 〉で表す。

##### 1)【学生の居場所を確保する】

このカテゴリーは、《学生の休憩場所や宿泊場所がなくて申し訳ない》、《病院全体で学生の休憩室を調整し確保する》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。

実習施設には、学生の休憩室や更衣室があることが求められている。実習指導者は、休憩室には学生が心地よく過ごすことのできる居場所が必要と考えていた。実習を受け入れるにあたって、学生が使用できる〈更衣室や休憩室が整備されていなくて学生に気の毒と思う〉や、〈学生が遠方からくるので宿泊場所が整っていないことが課題だ〉と考え、落ち着いて過ごせるような《学生の休憩場所や宿泊場所がなくて申し訳ない》と感じていた。休憩場所や宿泊場所の確保は看護部だけでは対応できないため、担当部署である〈総務課と相談して職員寮に宿泊できるように調整した〉。また学生が落ち着いて昼食をとったり、病院が患者用に配膳しているお茶が飲めるように、〈休憩

表 小規模病院の実習指導者の体験

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
学生の居場所を確保する	学生の休憩場所や宿泊場所がなくて申し訳ない	更衣室や休憩室が整備されていなくて学生に気の毒と思う 学生が遠方からくるので宿泊場所が整っていないことが課題だ
	病院全体で学生の休憩室を調整し確保する	総務課と相談して職員寮に宿泊できるように調整し 休憩室や昼食の配慮など、栄養士や厨房スタッフと調整した
病院の幅広い活動や自分たちの看護を知ってほしい	在宅で生活している患者と家族の生活を知ってほしい	家庭での生活しながら療養している様子を見てもらいたい 終末期、ぎりぎりまで在宅で過ごせるおうちパワーを学生に見てもらいたい
	自信をもっている看護や病院の特徴を知ってほしい	一般病院とは違って、自分の病院では退院支援をスタッフもやっていることを学生に知ってもらいたい 退院後の患者の生活が拡大できることを考えた関りを見てもらいたい 病棟看護師が自ら退院支援を行うことをみてもらいたい
	知られていない自分たちの看護を知ってほしい	退院後の生活を患者と一緒に考えることを知ってほしい
	各部署に活動の特徴の説明を依頼する	入院中から退院後までずっとつながっていることや多職種が連携して関わっていることについて通してみてもらいたい 学生の実習日程がわかったら、栄養士やOTの他職種に実習協力の依頼を行う 現場で起こっていることの背景を理解してほしい
	自分のありのままの看護師を知ってほしい	現場のリアルを見てもらい、どんな原因でそうなるか感じてほしい この病院に勤める仲間になるかもしれないという機会になればよいと感じる
	自分たちの看護と一緒にやりたいと思ってほしい	学生には、看護師になりたいと思ってもらい、一緒に仲間として対等の立場で話をして関わっていきたい
学生が関わることで変化する患者の感情や体調を確認する	患者には学生の受け持ちの承諾を得る	患者にあらかじめ学生が来ることを伝え協力を依頼する 訪問先に学生実習の許可を得る
	学生が患者に良い刺激になってうれしい	学生が来ると患者は少し緊張するが明るくなる デイケアの利用者は、学生と一緒にスポーツをしたり、学生が隣に座るだけでも、学生を人と認め楽しんでいる
	患者の体調を優先して実習を中止する	学生がいると頑張りすぎて体調をくずす患者を気にかける 認知症の患者の感情の浮き沈みがあるときに、途中から患者が学生を受け入れられなくなってしまい学生に申し訳なかった
安心できる雰囲気の中で、学生の気づきを引き出す	学生の希望を尊重した患者を選定し気づきを引き出す	学生が関心を持てる患者を選定する 学生が何をしたいのかを確認して、学生の要望に応えられるように患者を選ぶ 指導者が答えを出すのではなく、学生に気づいてもらえるようなアプローチを大事にする
	学生の考えや気づきを引き出すことを大切にす	看護師は教えたがるわけではないが、共に学ぶことを大切にして、学生が自分で考えることを大切にしたい 学生は細かく指導しなくても感じ取れるので、細かくは敢えて言わないようにした
	指導内容を学生の目的に合わせる	説明する内容は同じでも学生の目的に合わせて説明する
	楽しい雰囲気を実習してもらいたい	学生が楽しんで実習できるよう雰囲気づくりに取り組んだ 学生がスタッフを打ち解けるためにと一緒にお昼休憩をした
	学生の健康や安全に気を配る	学生が倒れないように学生の健康面のチェックと配慮を行う
	学生が実施できる技術レベルを確認する	学生がやってよい技術レベルを確認している やっていいことと悪いことの中でどこまで学生にさせるか考え、学生に無理なことはさせない



表 小規模病院の実習指導者の体験（続き）

指導者を中心としながら 看護師全体で協力する	指導者となるために実習指導者講習会を受ける	指導者となるために実習指導者講習会を受けた
	指導者は管理者に相談して実習内容を検討する	リーダーが作った実習内容の素案を師長や部長や関係者と相談調整をした 指導者会議がないので、部長や管理者に相談して迷いながらプログラムを作った
	指導者が実習に専念できるように業務を調整する	管理者に実習指導に専念できるよう勤務調整を依頼する 指導者の数と学生の数によって、病棟間で相談して学生受け入れ人数を調整している
	指導者の数に応じた指導方法を工夫する	指導者の不足時、学生指導と並行できる業務の調整をする 学生の実習の日程がわかっているの、課長に実習指導できるよう勤務の調整を依頼する
	指導者同士や先輩から指導をサポートしてもらう	他の指導者に学生指導の場面に立ち会ってもらってアドバイスをもらう 先輩からサポートしてもらって指導する
	実習に関する情報を病棟内で共有する	前日の状況から翌日学生に学ばせたいことをスタッフ間で共有する 学生へ目標を聞いたり、気づいたことや指導内容を申し送りシートでやり取りし指導者全員わかるように工夫する
	指導者だけでなく指導に他の看護師を巻き込む	指導者だけでなく学生の気持ちがわかる若いスタッフも指導を担当させる 他のスタッフにも学生に体験させられることがあったら、自主的に声をかけもらえるように働きかけていきたい
期待される指導責任を果 たすことに不安がある	実習指導に自信がない	大学の学生に対する指導ができるのか不安だった 学生に伝えたいことがたくさんあるが、どうやって伝えるか、学生の希望と合うか悩んだ
	指導者によって指導が異なる	指導者間でムラがないか悩んだ
	小規模病院なので多くの学生を受け入れることができない	学生の人数が多いと負担を感じる
	家庭訪問は学生の人数が限られてしまう	家庭訪問は学生の人数が限られてしまう
	看護師の数が限られているので指導者の負担が多い	小規模病院は看護師の数が少なく業務でいっぱいなので、指導で人がとられると負担に感じる 指導者は、他の役割も担っていて負担がかかっている
	緊急の仕事で学生指導ができなくなる	緊急の仕事で学生指導ができなくなる
	急な予定変更には臨機応変に対応できない	予定していた患者を受け持てなくなると受け持ち患者がいない
	大学と病院の指導の役割分担が混乱する	学生から相談されたときにどこまで自分たちが行い、どこを教員に頼るのか
よりよい指導を目指し実 習内容や方法を改善する	良い指導をしたいので勉強したい	しっかり学生に指導できるよう、知識や責任ある行動ができるようにしなければいけないと思った 自分の勉強不足はダメだと思った
	振り返りをして指導を改善する	翌年度は、前年度の良かったと思うことを取り入れて違うプログラムを作った 実習指導者会で、実習を受け入れての反省や今後を検討する
	他の施設の実習を参考にしたい	同系列の別の施設の指導者とは話ができいていないので一緒に話ができる機会がほしい 実習後に3つの施設で集まって確認したり反省会を行いたい
	他の施設の指導の様子を参考にして実習を改善する	大学で、他の実習施設との振り返りの会は、学生が他の病院で何をしてきているのかわかる 他の施設も入った大学での振り返りの会で、自分たちの施設の感想をまとめて聞けるので次の年に活かすことができる
	指導される立場だった学生時代の気持ちを参考に にする	自分が学生だったときを振り返って、自分がどんな指導者になりたいか考えた 自分達が学生の時どんな実習がためになったかを最初に考えた
	学生の希望に合わせて実習内容を調整できることが自分の病院にあってい る	学生の希望に合わせて実習内容を調整できることが自分の病院にあってい る
	実習の考えが大学と自分たちと同じなので自分 の病院に合っている	在宅看護に力を入れたい大学の考えは自分の病院の特徴と同じである
	実習目標が達成できるよう に大学と一緒に取り組 む	学生が何を学びたいのか目的をしっかりと把握する 大学の目的と病院の関りでずれがあるときは、大学と意見交換している 大学の教員や指導者のリーダーと事前に打ち合わせをした
実習目標が達成できるよ うに大学と一緒に取り組 む	自分たちの実習指導を大学に支持されている	学生の考えを引き出す実習を認めてもらえている 自分たちのありのままの看護を見せることがよいと言われた
	大学の教員が指導をフォローしてくれて安心す る	教員が何回も来てくれて学生のフォローをしてくれてとてもよい 自分達も指導の責任はもっているが、教員が学生をフォローしているので安 心している

表 小規模病院の実習指導者の体験（続き）

実習指導により看護師の学び直しになる	学生との会話から改めて看護とは何かを考える
	学生の実習から記録の重要性を考え直す
実習指導により看護のやりがいや責任感が強くなる	スタッフの異動もなくなれ合いになっている部分が多いので、学生に見られることでちゃんとしようと思う
	教えることは指導者自身が勉強して達成感ややりがいが出てくと思う 学生実習により、自分たちの自信や日々の業務に対する責任が維持できているように感じる
実習指導の経験で看護の質が向上する	不足していた患者指導に学生が作成した資料を活用する
	学生が作成した健康教育資料を、実習後に病院で活用している
実習指導を新人教育に活かしたい	実習で学生と関わることで、新人を受け入れる教育プログラムの見直しにつながった
	自分たちが習ったころとは教育が違うので、学生と接しながら勉強方法を考えて新人教育プログラムを見直した
実習指導ができる病院と評価される	実習を受け入れてから、自分の病院の名前が周知されていると感じる 大学と協力していることを社会にアピールしている

室や昼食の配慮など、栄養士や厨房スタッフと調整した」と、《病院全体で学生の休憩室を調整し確保する》ことを実施していた。

これらより、休憩室や通学が不便なために宿泊場所がないことから、学生が学習する以外の生活に必要な居場所がないと認識し、病院全体で既存の施設を調整し【学生の居場所を確保する】という体験が示された。

## 2)【病院の幅広い活動や自分たちの看護を知ってほしい】

このカテゴリーは、《在宅で生活している患者と家族の生活を知ってほしい》、《自信をもっている看護や病院の特徴を知ってほしい》、《知られていない自分たちの看護を知ってほしい》、《各部署に活動の特徴の説明を依頼する》、《自分のありのままの看護師を知ってほしい》、《自分たちの看護を一緒にやりたいと思ってほしい》の6つのサブカテゴリーで構成されていた。

対象となった小規模病院は、療養型病床を有し、地域包括ケアに力を入れている。このため実習内容は、施設内の慢性疾患を持つ患者の看護から退院後の医療依存度の高い患者の在宅看護と幅広い。《家庭での生活しながら療養している様子を見てもらいたい》、《終末期、ぎりぎりまで在宅で過ごせるおうちパワーを学生に見てもらいたい》と、自分たちの看護の対象である《在宅で生活している患者と家族の生活を知ってほしい》と考えていた。また、自分たちの看護の対象の特徴を理解してもらうと同時に《一般病院とは違って、自分の病院では退院支援をスタッフもやっているこ

とを学生に知ってもらいたい》、《退院後の患者の生活が拡大できることを考えた関りを見てもらいたい》と、自分たちが《自信をもっている看護や病院の特徴を知ってほしい》と考えていた。実習指導者は、自分たちの看護に自信を持っているが、自分の施設は高度医療や先進的医療といった学生が関心をもつ活動でないと思っている。このため《病棟看護師が自ら退院支援を行うことをみてもらいたい》、《退院後の生活を患者と一緒に考えることを知ってほしい》といった《知られていない自分たちの看護を知ってほしい》と考えていた。《入院中から退院後までずっとつながっていることや多職種が連携して関わっていることについて通してみてもらいたい》と思い、自分の施設の特徴を知ってもらうため《学生の実習日程がわかったら、栄養士やOTの他職種に実習協力の依頼を行う》といった《各部署に活動の特徴の説明を依頼する》ことを行っていた。理論の理解は学内でできるが、本物の患者に対して実践活動は実習でしか経験できない。そこで、《現場で起こっていることの背景を理解してほしい》、《現場のリアルを見てもらい、どんな原因でそうなるか感じてほしい》と、《自分のありのままの看護師を知ってほしい》と考えていた。さらに、自分の病院の幅広い活動や自分たちが自信をもって実践している看護のありのままを知ってもらい、《この病院に勤める仲間になるかもしれないという機会になればよいと感じる》、《学生には、看護師になりたいと思ってもらい、一緒に仲間として対等の立場で話をして関わっていききたい》と、《自分たちの看護を一緒にやりたいと思ってほしい》と願っていた。

これらから、慢性期疾患の治療や地域包括ケアに力を入れている自分の病院の特徴や自分たちが誇りをもって実践している看護を学生に理解してもらい、将来は一緒に自分たちが誇りに思う看護と一緒にやりたいと願う【病院の幅広い活動や自分たちの看護を知ってほしい】という体験が示された。

### 3)【学生が関わることで変化する患者の感情や体調を確認する】

このカテゴリーは、《患者には学生の受け持ちの承諾を得る》、《学生が患者に良い刺激になってうれしい》、《患者の体調を優先して実習を中止する》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

療養型病床に入院している患者の多くは、高齢で認知レベルが低下している。このような患者は、日々の生活の変化に適応しにくい。実習指導者は、学生が突然やってきて関わることで患者に過度なストレスにならずに学生と関係を築けるよう、〈患者にあらかじめ学生が来ることを伝え協力を依頼する〉ことや、家庭訪問の際には〈訪問先に学生実習の許可を得る〉といった《患者には学生の受け持ちの承諾を得る》ことを行っていた。高齢者は若い人と話をすることを喜ぶことが多い。実習指導者は、〈学生が来ると患者は少し緊張するが明るくなる〉、〈デイケアの利用者は、学生と一緒にスポーツをしたり、学生が隣に座るだけでも、学生を人と認め楽しんでいる〉と患者の変化を読み取り、《学生が患者に良い刺激になってうれしい》と感じていた。しかし、実習で学生が関わることで患者の通常の生活パターンを崩し、患者の気持ちや体調が変化することがある。〈学生がいると頑張りすぎて体調をくずす患者を気にかける〉、また〈認知症の患者の感情の浮き沈みがあるときに、途中から患者が学生を受け入れられなくなってしまう学生に申し訳なかった〉と、学生の実習の重要性を認識しながらも、患者の健康状態を悪化させないことを優先し《患者の体調を優先して実習を中止する》と判断を行った。

これらから、学生に指導しながらも、学生が関わっている患者の感情や体調に配慮する【学生が関わることで変化する患者の感情や体調を確認する】という体験が示された。

### 4)【安心できる雰囲気の中で、学生の気づきを引き出す】

このカテゴリーは、《学生の希望を尊重した患者を選定し気づきを引き出す》、《学生の考えや気づきを引き出すことを大切にする》、《指導内容を学生の目的に合わせる》、《楽しい雰囲気で実習してもらいたい》、《学生の健康や安全に気を配る》、《学生が実施できる技術レベルを確認する》の6つのサブカテゴリーで構成されていた。

実習では学生は患者と直接かかわることで学びを得る。このため、〈学生が関心を持てる患者を選定する〉、〈学生が何をしたいのかを確認して、学生の要望に応えられるように患者を選ぶ〉といった《学生の希望を尊重した患者を選定し気づきを引き出す》ことを行っていた。指導方法として、〈指導者が答えを出すのではなく、学生に気づいてもらえるようなアプローチを大事にする〉、〈看護師は教えたがるわけではないが、共に学ぶことを大切にして、学生が自分で考えることを大切にしたい〉や、〈学生は細かく指導しなくても感じ取れるので、細かくは敢えて言わないようにした〉と、《学生の考えや気づきを引き出すことを大切にする》ことや、〈説明する内容は同じでも学生の目的に合わせて説明する〉といった《指導内容を学生の目的に合わせる》ことを行っていた。一方、実習中に緊張から体調を崩す学生がいる。緊張の少ない雰囲気で実習できるように、〈学生が楽しんで実習できるよう雰囲気づくりに取り組んだ〉り、〈学生がスタッフを打ち解けるために一緒に昼休憩をした〉といった《楽しい雰囲気で実習してもらいたい》と願い、〈学生が倒れないように学生の健康面のチェックと配慮を行う〉といった《学生の健康や安全に気を配る》ことを行っていた。また、実習では医療事故が発生する可能性がある。医療事故は、対象者である患者を傷つけるだけでなく、事故を起こした学生も精神的に傷つけてしまう。医療事故予防のため、〈学生がやってよい技術レベルを確認している〉、〈やっていいことと悪いことの中でどこまで学生にさせるか考え、学生に無理なことはさせない〉といった《学生が実施できる技術レベルを確認する》ことを行っていた。

これらから、学生は自ら気づく力を持っていることを実感して、自ら考えられるように患者を選



定し、楽しい安全な雰囲気の中で、学生の自らの考えや気づきを引き出すことを大切に指導する【安心できる雰囲気の中で、学生の気づきを引き出す】という体験が示された。

##### 5)【指導者を中心としながら看護師全体で協力する】

このカテゴリーは、《指導者となるために実習指導者講習会を受ける》、《指導者は管理者に相談して実習内容を検討する》、《指導者が実習に専念できるように業務を調整する》、《指導者の数に応じた指導方法を工夫する》、《実習に関する情報を病棟内で共有する》、《指導者だけでなく指導に他の看護師を巻き込む》、《指導者同士や先輩から指導をサポートしてもらう》という7つのサブカテゴリーで構成されていた。

これまで実習を受け入れていなかった小規模病院には、実習指導者講習会の受講者がほとんどいない。実習指導者として必要な知識と技術を習得するため、《指導者となるために実習指導者講習会を受ける》ことを行っていた。実習受け入れ時の調整や実際の実習指導は、看護部や病院全体の協力が必要となる。〈リーダーが作った実習内容の素案を師長や部長や関係者と相談調整をした〉り、〈指導者会議がないので、部長や管理者に相談して迷いながらプログラムを作った〉といった《指導者は管理者に相談して実習内容を検討する》ことを行っていた。また、〈管理者に実習指導に専念できるよう勤務調整を依頼する〉、〈指導者の数と学生の数によって、病棟間で相談して学生受け入れ人数を調整している〉というように、看護部や病院全体で《指導者が実習に専念できるように業務を調整する》や、〈指導者の不足時、学生指導と並行できる業務の調整をする〉、〈学生の実習の日程がわかっているので、課長に実習指導できるよう勤務の調整を依頼する〉といった《指導者の数に応じた指導方法を工夫する》ことを行っていた。さらに、〈他の指導者に学生指導の場面に立ち会ってもらってアドバイスをもらう〉というように実習指導者同士で研鑽したり、〈先輩からサポートしてもらって指導する〉といった《指導者同士や先輩から指導をサポートしてもらう》ことを行っていた。病棟に勤務している実習指導者は、看護スタッフとして夜間勤務や休日勤務もある。このため、勤務のシフトにより学生が実習

している平日の昼間は不在となる。実習指導者が不在となったときの対応として、〈前日の状況から翌日学生に学ばせたいことをスタッフ間で共有する〉、〈学生へ目標を聞いたり、気づいたことや指導内容を申し送りシートでやり取りし指導者全員わかるように工夫する〉といった《実習に関する情報を病棟内で共有する》ことや、〈指導者だけでなく学生の気持ちがわかる若いスタッフも指導を担当させる〉、〈他のスタッフにも学生に体験させられることがあったら、自主的に声かけをもらえるように働きかけていきたい〉といった《指導者だけでなく指導に他の看護師を巻き込む》ことを行っていた。

これらから、限られた人数の実習指導者で実行可能な実習内容を工夫したり、看護管理者や病棟看護師を巻き込み、看護スタッフ全体で実習指導を行うという【指導者を中心としながら看護師全体で協力する】体験が示された。

##### 6)【期待される指導責任を果たすことに不安がある】

このカテゴリーは、《実習指導に自信がない》、《指導者によって指導が異なる》、《小規模病院なので多くの学生を受け入れることができない》、《看護師の数が限られているので指導者の負担が多い》、《急な予定変更には臨機応変に対応できない》、《大学と病院の指導の役割分担が混乱する》の6つのサブカテゴリーで構成されていた。

大学の実習の指導を経験したことがなく、3年課程の専門学校を卒業した実習指導者は、4年制大学での講義や実習の様子がイメージしにくい。このため〈大学の学生に対する指導ができるのか不安だった〉、〈学生に伝えたいことがたくさんあるが、どうやって伝えるか、学生の希望と合うか悩んだ〉というように《実習指導に自信がない》と感じていた。また大学が求める実習に対して〈指導者間でムラがないか悩んだ〉と《指導者によって指導が異なる》と感じていた。大学は、実習施設には一人でも多くの学生を受け入れてほしいと考えている。しかし、実習学生が増えることは、学生の実習目的を考慮した受け持ち患者の選定や指導体制の調整など、病院の負担が大きくなる。このため〈学生の人数が多いと負担を感じる〉、〈家庭訪問は学生の人数が限られてしまう〉といった《小規模病院なので多くの学生を受け入れること

ができない》と感じていた。また、実習指導者は大学が求める指導を行うために実習指導に専念したいが、〈小規模病院は看護師の数が少なく業務でいっぱいなので、指導で人がとられると負担に感じる〉、〈指導者は、他の役割も担っていて負担がかかっている〉といった《看護師の数が限られているので指導者の負担が多い》と感じていた。さらに、病棟内の状態が悪化した患者のケアに急に入らなければならなかったり、学生の受け持ち患者の状態が悪化し学生が実習できなくなったときに、〈緊急の仕事で学生指導ができなくなる〉、〈予定していた患者を受け持てなくなると受け持ち患者がいらない〉といった《急な予定変更には臨機応変に対応できない》と感じていた。一方、大学の実習目標を学生が達成できるようにするために、〈学生から相談されたときにどこまで自分たちが行い、どこを教員に頼るのかわからなくなった〉と《大学と病院の指導の役割分担が混乱する》と感じていた。

これらから、経験したことがない実習指導に自信がなく、計画通りにいかないと対応することができない、限られた指導者に負担が大きくなり、実習指導が思うようにできないという【期待される指導責任を果たすことに不安がある】体験が示された。

#### 7)【よりよい指導を目指し実習内容や方法を改善する】

このカテゴリーは、《良い指導をしたいので勉強したい》、《振り返りをして指導を改善する》、《他の施設の実習を参考にしたい》、《他の施設の指導の様子を参考にして実習を改善する》、《指導される立場だった学生時代の気持ちを参考にする》、《実習指導が負担とは感じない》の6つのサブカテゴリーで構成されていた。

実習指導者は、実習指導の経験が浅い。〈自分の勉強不足はダメだと思った〉、〈しっかり学生に指導できるよう、知識や責任ある行動ができるようにしなければいけないと思った〉と自分の指導力不足を自覚し、《良い指導をしたいので勉強したい》と考えていた。そして〈翌年度は、前年度の良かったと思うことを取り入れて違うプログラムを作った〉、〈実習指導者会で、実習を受け入れての反省や今後を検討する〉といった課題を改善

につなげるように、自施設内の実習指導者間で《振り返りをして指導を改善する》ことを行っていた。また、〈同系列の別の施設の指導者とは話ができていないので一緒に話ができる機会がほしい〉、〈実習後に3つの施設で集まって確認したり反省会を行いたい〉といった《他の施設の実習を参考にしたい》と考えていた。また〈大学で、他の実習施設との振り返りの会は、学生が他の病院で何をしてきているのかわかる〉、〈他の施設も入った大学での振り返りの会で、自分たちの施設の感想をまとめて聞けるので次の年に活かすことができる〉と《他の施設の指導の様子を参考にして実習を改善する》ことを願っていた。さらに、学生の立場で指導ができるように〈自分が学生だったときを振り返って、自分がどんな指導者になりたいか考えた〉、〈自分達が学生の時どんな実習がためになったかを最初に考えた〉といった《指導される立場だった学生時代の気持ちを参考にすること》を行っていた。一方、よい実習に向けてできる限りのことを行っているが《実習指導が負担とは感じない》が示された。

これらより、個人や病院全体で実習を振り返り、課題を明確にして改善しよい実習を目指す【よりよい指導を目指し実習内容や方法を改善する】という体験が示された。

#### 8)【実習目標が達成できるように大学と一緒に取り組む】

このカテゴリーは、《実習の考えが大学と自分たちと同じなので自分の病院に合っている》、《大学に実習内容を確認して目的に沿った内容を計画する》、《自分たちの実習指導を大学に支持されている》、《大学の教員が指導をフォローしてくれて安心する》の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

初めて実習指導を引き受ける病院や指導者にとって、大学の求める実習指導ができるのか不安がある。実習の受け入れ時に大学と打ち合わせを行い、〈学生の希望に合わせて実習内容を調整できることが自分の病院にある〉と思い、〈在宅看護に力を入れたい大学の考えは自分の病院の特徴と同じである〉ことを大学から確認し、《実習の考えが大学と自分たちと同じなので自分の病院に合っている》と考えていた。そして、大学と

一緒に実習をすすめていくために〈学生が何を学びたいのか目的をしっかりと把握する〉、〈大学の目的と病院の関りでずれがあるときは、大学と意見交換している〉、〈大学の教員や指導者のリーダーと事前に打ち合わせをした〉といった《大学に実習内容を確認して目的に沿った内容を計画する》ことを行っていた。実習中は、大学から〈学生の考えを引き出す実習を認めてもらえている〉と感じたり、〈自分たちのありのままの看護を見せることがよいと言われた〉ことから《自分たちの実習指導を大学に支持されている》と感じていた。実習中、〈教員が何回も来てくれて学生のフォローをしてくれてとてもよい〉、〈自分達も指導の責任はもっているが、教員が学生をフォローしているので安心して〉と、大学と一緒に取り組んでいることを実感し《大学の教員が指導をフォローしてくれて安心する》と感じていた。

これらから、実習指導者が病院の大事にしている看護が大学と同じであることを確認し、大学の考えに沿った実習を行うとともに、大学から支援を受け、大学と一緒に実習指導を行っていることを実感している【実習目標が達成できるように大学と一緒に取り組む】という体験が示された。

## 9)【実習指導の経験で看護の質が向上する】

このカテゴリーは《実習指導により看護師の学び直しになる》、《実習指導により看護のやりがいや責任感が強くなる》、《不足していた患者指導に学生が作成した資料を活用する》、《実習指導を新人教育に活かしたい》、《実習指導ができる病院と評価される》の5つのサブカテゴリーで構成されていた。

実習指導の中で〈学生との会話から改めて看護とは何かを考える〉ことや、〈学生の実習から記録の重要性を考え直す〉機会となり、《実習指導により看護師の学び直しになる》と考えていた。また、〈スタッフの異動もなくなれ合いになっている部分が多いので、学生に見られることでちゃんとしようと思う〉、〈教えることは指導者自身が勉強して達成感ややりがいが出てくると思う〉、〈学生実習により、自分たちの自信や日々の業務に対する責任が維持できているように感じる〉と、指導者自身の成長として《実習指導により看護のやりがいや責任感が強くなる》と感じていた。〈学

生が作成した健康教育資料を、実習後に病院で活用している》と《不足していた患者指導に学生が作成した資料を活用する》ことを行っていた。また、〈実習で学生と関わることで、新人を受け入れる教育プログラムの見直しにつながった〉、〈自分たちが習ったころとは教育が違うので、学生と接しながら勉強方法を考えて新人教育プログラムを見直した〉と《実習指導を新人教育に活かしたい》と実習指導の経験を病院全体として活用することを考えていた。看護学生の実習施設となるためには、十分な指導体制が整っていることが必要である。つまり、実習病院となることは、看護学生の実習を受けることができる質の高い看護を提供できていると大学から評価されていることである。そこで、〈実習を受け入れてから、自分の病院の名称が周知されていると感じる〉、〈大学と協力していることを社会にアピールしている〉といった《実習指導ができる病院と評価される》と考えていた。

これらから、実習指導を引き受けた経験が、看護師個人のやりがいだけでなく、病院全体の看護の質の向上や人材育成につながっていることを実感している【実習指導の経験で看護の質が向上する】という体験が示された。

## 考 察

### 1. 小規模病院の実習指導

実習指導者は、実習を受け入れるにあたり、病院全体で【学生の居場所を確保する】ことを行い、学生が少しでも落ち着いて安心して休憩し、学習に集中できるよう学生の居場所を確保していた。

実習では、《自信をもっている看護や病院の特徴を知ってほしい》と学生に期待し、《自分たちの看護を一緒にやりたいたいと思ってほしい》と願っていた。実習指導者は、社会に求められている在宅医療や地域包括ケアを支えている自分たちの看護に誇りをもち、後輩である学生たちに自信のある看護を伝えたいという気持ちが強いと考える。そして自信のある《自分たちの看護を一緒にやりたいたいと思ってほしい》と学生の将来に期待していた。実習指導者は、そのような自分たちの看護に熱い思いを持ちながらも、自分たちの思いを一方的に指導するのではなく、《学生の希望を尊重し



た患者を選定し気づきを引き出す》や《学生の考えや気づきを引き出すことを大切にする》という学生自ら学ぶことを尊重した指導方法を用いて、対象の理解や看護実践を指導していた。そして、実習指導者は、患者とかかわる中で学生の気づきを引き出すために、《患者には学生の受け持ちの承諾を得る》ことで、学生が患者と良好な関係の中で実習できるよう働きかけていた。これらのことから、実習指導者は、実習で学生を単に指導するだけでなく、自分たちの後輩や仲間として考え、暖かい雰囲気の中で大切に育もうとしていたと考える。

実習指導者は、患者とのかかわりから学生たちの気づきを引き出すことを大切にしながら、患者の状態が悪化した時には《患者の体調を優先して実習を中止》していた。実習が中止となれば、学生の学習の機会が奪われてしまう。しかし、実習指導者は、看護専門職として倫理原則に沿って患者を尊重する行動をとっていた。そして、学生の気づきを引き出すだけでなく、《学生の健康や安全に気を配る》ことや《学生が実施できる技術レベルを確認する》ことで医療事故を予防する学生と患者の双方を尊重する実習指導を行っていた。これは、「患者と学生の双方の擁護という特徴をもつ行動」が看護学実習の指導の特徴であることを明らかにした伊勢根ら<sup>14)</sup>と同様であった。

先行研究<sup>8)9)10)</sup>において、実習指導者は指導における不安があることが明らかとなっている。本研究対象の実習指導者も、実習開始前や実習中に、実習指導者が少なく、実習指導者が学生の実習指導に専念できる人的余裕がないことから、《小規模病院なので多くの学生を受け入れることができない》、《看護師の数が限られているので指導者の負担が多い》といった不安を感じていた。しかし、不安を感じる一方で、《指導者が実習に専念できるように業務を調整》したり、《指導者だけでなく指導に他の看護師を巻き込む》など、【指導者を中心としながら看護師全体で協力する】ことで、実習指導を行っていた。さらに、【よりよい指導を目指し実習内容や方法を改善する】ために、〈実習指導者会で、実習を受け入れての反省や今後を検討〉するだけでなく、《他の施設の実習を参考にしたい》と考えていた。

小規模病院の実習指導者は、自分たちの看護を、

自分の仲間と考える学生に知ってほしいと強く思っていた。指導の際は、患者の生活や健康に配慮しながら、患者と学生の双方を尊重していた。実習指導は、少数しかいない実習指導者に負担がかかっているが、病院の管理者や他の看護師と協力し、さらに良い実習を目指したいと考えていた。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会の看護学実習ガイドライン<sup>15)</sup>では、実習指導者は、対象者の状態に関する臨床判断を説明し、適切な看護ケアの技術を示して学生を導き、対象者と学生との関係形成を支援、プロフェッショナルとしての姿勢を示す等、看護実践者としての役割モデルとなることを期待している。本研究対象となった小規模病院の実習指導者は、患者を尊重しながら、在宅医療や地域包括ケアに関することといった社会に求められている看護を実践しプロフェッショナルとしての姿勢を示していると考え

## 2. 実習指導による小規模病院にとっての成果

実習指導者は、《振り返りをして指導を改善する》、《他の施設の指導の様子を参考にして実習を改善する》というように【よりよい指導を目指し実習内容や方法を改善】しようと取り組んでいた。現状を振り返り、他の施設を参考にしながら改善するという、いわゆるPDCAの過程を実施できることは、その施設の看護の質の向上に寄与すると考える。また、《指導者だけでなく指導に他の看護師を巻き込む》、《指導者同士や先輩から指導をサポートしてもらう》というように【指導者を中心としながら看護師全体で協力する】体制を作ろうとしていた。さらに、実習指導者は、《実習指導により看護師の学び直しになる》、《実習指導により看護のやりがいや責任感が強くなる》というように【実習指導の経験で看護の質が向上する】と感じていた。このことは、実習指導により、自分の学ぶ姿勢を身につけたり<sup>11)</sup>、実習指導者自身の成長、患者への良い影響、スタッフ教育への活用<sup>13)</sup>といった先行研究の結果と同様であった。実習指導は、指導者の看護の学び直し、院内教育への活用といった小規模病院にとって看護の質の向上という利益をもたらしていたと考える。また、実習指導者は、実習を引き受けることで、自分の病院が社会から《実習指導ができる病院と評価さ

れる》と感じていた。実習指導によって自施設が社会から評価されるという体験は先行研究では見当たらない。実習指導により社会から認められると感じるという体験は、小規模病院の実習指導者の特徴と考える。

医療機関や公共交通機関の少ない地域に暮らす住民、特に高齢者にとっては、小規模病院は、高度医療を担う遠くの大規模病院より頼りとなる。一般的に、小規模病院に対する学生の認知度は、高度な医療を提供する急性期病院や大規模病院に比べ低く、卒業後すぐに小規模病院に就職する学生はほとんどいない。学生の多くは、在宅医療や地域包括ケアシステムの重要性を理解しながらも、大規模な総合病院に就職する傾向がある。また、200床未満の病院は、200床以上の病院に比べ看護職員の離職率が高い<sup>16)</sup>ことが報告されている。この理由は明らかではないが、給与が低いことや研修体制が手厚くないことが予測される。実習指導を通じて、学び直しの機会や院内教育の充実となれば、新卒学生の就職や離職防止にもつながると考える。

### 3. 小規模病院と大学との協働連携

小規模病院の実習指導者は、《実習の考えが大学と自分たちと同じなので自分の病院に合っている》と考えて実習を受け入れ、《大学に実習内容を確認して目的に沿った内容を計画》し、《自分たちの実習指導を大学に支持されている》と感じ、《大学の教員が指導をフォローしてくれて安心》し【実習目標が達成できるように大学と一緒に取り組む】んでいた。実習目標や内容を、大学と病院で丁寧に情報を共有する必要がある。また、大学は、【病院の幅広い活動や自分たちの看護を知ってほしい】という実習指導者の考えや、【学生が関わることで変化する患者の感情や体調を確認】したり、【安心できる雰囲気の中で、学生の気づきを引き出す】といった大学が求める指導を実習指導者が行っていることを適切に評価し支持する必要があると考える。

一方、実習指導者は、《実習指導に自信がない》、《急な予定変更には臨機応変に対応できない》、《看護師の数が限られているので指導者の負担が多い》、《大学と病院の指導の役割分担が混乱する》といった【期待される指導責任を果たすことに不

安】を感じていた。実習指導者は、大学の学生の実習指導という責任を認識している。実習指導において、大学と実習施設それぞれの責任と実習指導者の役割を明確にし、実習指導者の混乱を防ぐ必要がある。最終的な実習の責任は大学にある。大学は、学生に対する指導とともに、実習指導者への指導や支援が必要と考える。

実習において、小規模病院は【学生の居場所を確保】しなければならなかった。また、実習指導者が少人数のため《指導者が実習に専念できるように業務を調整》したり、《指導者の数に応じた指導方法を工夫する》といった【指導者を中心としながら看護師全体で協力】しなければならなかった。このように、実習指導は、小規模病院に多少なりとも負担を強いている。大学は、看護学生の実習指導を依頼する際は、看護部門だけでなく、病院全体に看護学実習を受け入れに関する働きかけや、病院にとって負担過度な負担とないような配慮が必要と考える。

実習指導は、小規模病院にとって負担であると同時に、【よりよい指導を目指し実習内容や方法を改善】し、【実習指導の経験で看護の質が向上する】という利益も与えていた。小規模病院における実習は、大学にとっても、社会に求められている在宅医療や地域包括ケアに関するといった看護の実習施設の確保という大きな利益がある。大学と小規模病院それぞれが、実習によって求める目標を具体的に共有し、実習指導を介して大学と小規模病院の双方が目標達成を実感できるよう協働連携することが必要と考える。

小規模病院の指導者は、実習指導の負担を感じながら、学生と患者の双方を尊重した実習指導を行い、その結果実習指導による自施設にもたらす成果を感じていることが明らかになった。学生、患者、小規模病院、大学のすべてにとって意義のある実習となるよう、大学は実習指導者の体験を丁寧に把握する必要があることが示唆された。

## 結 論

小規模病院の実習指導者の体験として、実習受け入れ時から、自分たちの看護を、自分の仲間と考える学生に知ってほしいと強く思う一方、指導の際は、患者の生活や健康に配慮しながら、学生



の双方を尊重している体験が示された。また、実習指導者に実習指導の負担がかかっているが、大学と一緒に取り組む実習指導により、指導者自身や病院全体の看護の質の向上を感じる体験が示された。さらに病院の管理者や他の看護師と協力し、さらに良い実習を目指したいという体験が示された。

大学は実習の受け入れの段階から、小規模病院の実習指導を支援する役割があることが示唆された。

## 謝 辞

本研究にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 18K10236 の助成を受けて行った研究の一部である。

本研究において、開示すべき利益相反はない。

## 文 献

- 1) 看護系大学に関する実態調査（2018 年度状況調査）. 日本看護系大学協議会データベース委員会、日本私立看護系大学協会. P99  
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/05/2019DB.pdf>  
<https://doi.org/10.32283/rep.5ao52d4e>  
(2021 年 8 月 2 日アクセス)
- 2) 平成 29 年度文部科学省大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業 看護系大学学士課程の臨地実習とその基準作成に関する調査研究報告書 平成 30 年 3 月 日本看護系大学協議会. p32  
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/12/H29MEXTProject.pdf>  
<https://doi.org/10.32283/rep.0ca042ea>  
(2021 年 8 月 2 日アクセス)
- 3) 文部科学省平成 26 年度「課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業 山形発・地元ナース養成プログラム平成 26 年度活動報告書 公立大学法人山形県立保健医療大学
- 4) 文部科学省平成 26 年度「課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業 山形発・地元ナース養成プログラム平成 27 年度活動報告書 公立大学法人山形県立保健医療大学
- 5) 文部科学省平成 26 年度「課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業 山形発・地元ナース養成プログラム平成 28 年度活動報告書 公立大学法人山形県立保健医療大学
- 6) 文部科学省平成 26 年度「課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業 山形発・地元ナース養成プログラム平成 29 年度活動報告書 公立大学法人山形県立保健医療大学
- 7) 文部科学省平成 26 年度「課題解決型高度医療人材養成プログラム」採択事業 山形発・地元ナース養成プログラム平成 30 年度活動報告書 公立大学法人山形県立保健医療大学
- 8) 大高恵美, 佐藤サツ子, 佐藤恵美子. 療養型医療施設における臨地実習指導の現状と課題～初めて実習指導を行った臨地実習指導者と病棟管理者の面接調査より～. 日本赤十字秋田短期大学紀要. 2015. 10 : 39-47.
- 9) 酒井禎子, 中澤紀代子, 石田和子, 飯吉令枝, 加賀美亜矢子, 小林綾子, 山田真衣, 後田穰, 岡村典子, 高塚麻由, 河野優子, 菊地美帆, 櫻井信人. 看護学実習指導者が感じている指導上の困難と学習ニーズ. 新潟県立看護大学紀要. 2015. 4 : 12-16.
- 10) 伊良波理恵, 嘉手苺英子. 実習指導をし始めた臨床看護師が感じた困難と対応. 沖縄県立看護大学紀要. 2016. 17 : 97-106.
- 11) 手塚祐美子, 清水健史, 伊藤治幸. 新規に精神看護学実習を受け入れた病院の実習指導者の指導体験. 青森県立保健大学雑誌. 2018. 18 : 9-14.
- 12) 出石幸子, 永見純子, 村口孝子, 平野裕美, 前田陽子. 新設 A 大学の成人看護学実習を初めて受け入れる指導者の思い. 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要. 2019. 78 : 1-7.
- 13) 佐々木満智子, 中谷信江, 井上真奈美, 藤本美由紀, 家入裕子, 白蓋真弥, 丹佳子. 看護学臨地実習で実習指導者がとらえた実習指導のやりがい. 山口県立大学学術情報. 2018. 11 : 67-72.
- 14) 伊勢根尚美, 舟島なおみ. 看護学実習指導に携わる看護師の行動に関する研究－病院を

- フィールドとする実習に焦点を当ててー. 看護  
教育学研究. 2017. 26 (1) : 39-54.
- 15) 大学における看護系人材養成の在り方に関する  
検討会. 大学における看護系人材養成の在り  
方に関する検討会 第二次報告 看護学実習ガイ  
ドライン. 2020.
- 16) 日本看護協会. 2020 年病院看護実態報告書.  
日本看護協会調査研究報告. 2021. 96.

## 要 旨

看護系大学の実習を受け入れた小規模病院の実習指導者の体験を明らかにした。小規模病院の実習指導者を対象に面接調査を行った。実習指導に関して、実際に行ったことや考えたこと感じたことの体験を包括的に語ってもらい、帰納的に分析した。【病院の幅広い活動や自分たちの看護を知ってほしい】【安心できる雰囲気の中で、学生の気づきを引き出す】【指導者を中心としながら看護師全体で協力する】【期待される指導責任を果たすことに不安がある】【実習目標が達成できるように大学と一緒に取り組む】【実習指導の経験で看護の質が向上する】など 9 つのカテゴリーが体験として抽出された。小規模病院の実習指導者は、その地域で生活する人々の生活を支える自分たちの病院と看護に強い誇りをもって看護を実践し、対象者と学生の関係形成を支えていた。大学が求める実習指導が小規模病院において可能であるとともに、小規模病院の実習指導者は、看護実践者としての役割モデルとしてなりえることが示唆された。

**キーワード：**看護学実習、小規模病院、実習指導者、実習指導、看護系大学